



ニュースレター ぶどうの木

第26号

2025年6月



学園創立100周年記念に ～感謝と熱意と希望を～

2025年は、学園にとって創立100周年の大きな記念の年です。

1925年4月8日、現在の藤女子中高の前身である「札幌藤高等女学校」が開校しました。それは北海道で初めての5年制の高等女学校で、男子と同じレベルの中等教育を行うことを目指しました。生徒が集まるかどうか不安の中で迎えた最初の入学試験に、150名定員のところに317名の受験者があり、167名が入学しました。

ところが、ドイツから来日して5年目の待ちに待った最初の入学生たちを、誰よりも一番心待ちにしていたであろう初代校長シスター・ヨハンナ・サロモンの姿は、入学式に見ることができませんでした。3月下旬に虫垂炎手術のために急遽入院した彼女は、術後の経過が思わしくなく、そのまま5月27日に僅か37歳の短い生涯を神様にお返ししたのです。最後の夜に、枕辺に祈るシスターたちに次のように語りました。「私は自分のいのちをお捧げします。喜んでお捧げします。神様が日本の子どもたち、特に私たちの学校で学ぶ生徒たちを祝福してくださいますように」と。

開校のための種々の困難を乗り越え、

ようやく開校することができた喜びも、思いがけない大きな試練のうちに迎えることになりました。しかし、後任の校長としての責任を担ったシスター・クサヴェーラ・レーメを始めとする教職員たちは心と力を合わせて難局を乗り越え、生徒たち一人ひとりの幸せな成長のために尽くしました。

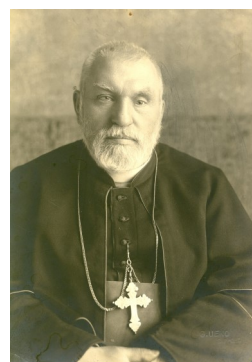
その後の100年の歴史を通じて、何も困難なことがなかった時代はなかったと言えるでしょう。しかし、その100年の長い歴史を振り返って、一言で表現しようとするなら、「感謝」という一語だけになります。

今年4月に帰天された教皇フランシスコが、数年前に言われたお言葉の中に、「感謝をもって過去を振り返り、熱意をもって現在を生き、希望をもって未来に向かう」というお言葉があります。過去・現在・未来という次元で物事を見たり感じたりする時に、非常に適切なお言葉であると思い、この度の100周年記念のモットーとしました。

創立者キノルド司教様は堅固な土台を築いてくださり、1952年5月22日に81歳で帰天されるまで、特に最も困難な戦争をはさむ時代に、シスターたちを賢明な助言によって導き、学校や生徒・教職員たちを守ってくださいました。

そのご生涯は、日々「熱意をもって

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。
人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」
(ヨハネ福音書15章5節)

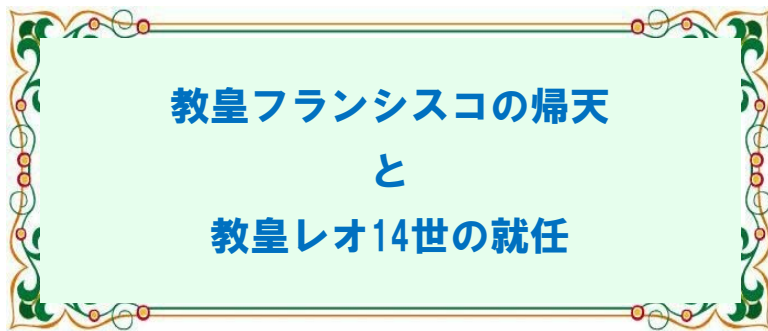


勢は、過去についての神様への深い感謝の念から生まれ出るものに違いありません。

その意味で、過去への深い感謝は現在と未来への前向きな姿勢につながります。自分のこれまでの生涯を振り返って、それが短かろうが長かろうが、そこにできるだけたくさんの感謝材料を見つけることができたなら幸いです。そこから現在の試練や困難に対する力を得ることができますし、また、未来に対する心配や不安を乗り越える勇気と力が与えられるでしょう。

創立以来100年を経て、今私たちは2世紀目を歩み始めました。少子化がどんどん進む中で、将来は不安材料に満ちています。だからこそ私たちは熱意をもって今を生き、希望をもって未来に向かいましょう。

(理事長 永田淑子)



教皇フランシスコの帰天 と 教皇レオ14世の就任

4月20日の日曜日、全世界の教会はイエス・キリストのご復活をお祝いする大きな祭日でした。バチカンの聖ペトロ広場では、復活祭のミサが盛大に行われて、その最後に車椅子にお座りになった教皇フランシスコが、祝福の言葉をか細いお声で述べられ、続いて専用の白い車で広場をゆっくりめぐり会衆を祝福されました。

その翌日の朝、世界中が驚く中で、フランシスコ教皇ご逝去の報が伝わりました。88歳のご生涯で、教皇としての在位は13年間でした。

13年前の3月に教皇に選任され、初めて教皇として広場の大勢の群衆の前に白い簡素な服装で現れ、歓呼の拍手が静かになった時に最初の挨拶を述べられました。その時私は非常に驚きました。「皆さん、今晚は。」と普通の人が普通に使う簡単な言葉で人々に語りかけられ、そして短いお言葉を終えて最後に、「私のために祈ってください。おやすみなさい」とこれも非常に普通に信徒たちが使う言葉で締めくくられたのです。

教皇の名前としてお選びになったのは「フランシスコ」。歴史上初めての教皇名でした。清貧・謙遜・単純・平和への愛・神の被造物への愛・苦しむ人への共感と温かい思いやり、etc. 教皇となって初めての復活祭前の最後の晩餐のミサを、聖ペトロ大聖堂の荘厳な祭壇ではなく、バチカンに近い刑務所で囚人と共に捧げ、式の中で囚人たち12人の足をひざまづいて洗われました。最後の晩餐でイエスが弟子たちの足を洗ってくださった、ヨハネ福音書の記述にならった行為です。

また、教皇となって初めてローマ市の外を訪問されたのが、ランペドゥーサ島というイタリア本土とアフリカ大陸の中間にある地中海上の非常に小さな島でした。この島はアフリカ大陸からの難民が小さな船で大勢押し寄せてきて、イタリア領であるこの島に上陸して難民申請をする場所になっていました。途中で多くの人が命を失うこともあります。フランシスコ教皇はこの小さな島を最初の訪問地としてお選びになったのです。この選びにフランシスコ教皇のお心が非常に端的に表れています。

その後、数多くの国を訪問されましたが、これまでの教皇が訪問していない小さな国々も訪れています。その中にはパプアニューギニア、東ティモール、トルコ、スリランカ、バングラデシュ、ミャンマー、中央アフリカ共和国、アルメニア、マダガスカル、モザンビーク、イラク、マルタなどもありました。その訪問先は、キリスト教徒が少数派の国々や、社会的に困難な状況にある地域、社会的弱者や紛争地域への支援を目的としていました。

私たちはフランシスコ教皇の帰天を惜しみながら、次の教皇の選出のために祈り、5月8日にアメリカ生まれでアメリカ育ちの新教皇が選出され、レオ14世を名乗られました。新教皇はアメリカ人ですが、若い頃から長年ペルーで宣教師として働かれ、ペルーの国籍も取得しておられます。更にレオ14世のお名前は、20世紀の初頭に逝去されたレオ13世を思い出させるお名前です。レオ13世は19世紀後半以来の産業革命による労働者階級の悲惨な状況を改善するために、「レールム・ノヴァールム」という有名な社会教説を出された教皇でした。私は、現代の労働者の権利や社会的公正のため、苦しむ人たちとの連帯を示した新教皇のお名前だと直感し、フランシスコ前教皇と共通した流れを汲む教皇に拍手を送りたくなりました。

更にレオ14世教皇は、アウグスチノ会という13世紀半ばに創立された古い修道会の会員で、その会は教育・社会福祉・宣教活動など様々な分野で会員が奉仕しています。日本のキリシタン時代にも宣教師が殉教し、福者とされています。トマス金鐐次兵衛は長崎県大村のキリシタンの家族に生まれ、イエズス会の学校で学んで学校閉鎖の後に1614年にマカオに追放され、1620年に密航で日本に戻り、2年後にマニラに渡ってアウグスチノ会に入会し、その後セブ島で1628年に司祭になりました。1631年に変装して帰国し、長崎奉行所の馬丁となってキリシタンたちを支え、夜は信者たちを訪問してミサを捧げるという生活をしました。彼の活動は奉行所に知られ、遂に1637年に捕らえられ、穴吊りの拷問を受けながら仲間の密告を迫られました。しかし、誰をも裏切ることなく、遂に殉教しました。2008年に長崎で行われた彼を含む188人の殉教者たちの列福式に、当時、アウグスチノ会の総長であられた新教皇レオ14世が参列しておられたのです。日本との新たな絆が発見されました。

新教皇は就任の最初の挨拶の時から、世界の戦争の解決と平和への希求を繰り返して述べられ、食料も家もなく悲嘆に暮れている人々、特に小さな子どもたちが生命の危険にさらされていることを、訴えられました。(Sr.永田淑子)

Pope Leo XIV@Pontifex

Even when it seems we are able to do little in life, it is always worthwhile. There is always the possibility to find meaning, because God loves our life.